

1 取物語 赤巻 3月ばかりで人

(10) 一万
あと一

5,506 P

1字アキ

44 取物語 (付) 19P 32+60P
20+50+

赤巻 取物語
29頁

竹取の翁の年齢

竹取の翁の年齢

(1) 冒頭近く「公卿、年七十に餘りぬ。今日

(2) 末尾近く「公卿、今年五十ばかりなり

不一致(矛盾)が見られる、という。

12.5
6M
「竹取物語・伊勢物語・大和物語」日本古

典文学大系、岩波書店、昭和三十二年十一月

二十五日(第二刷)発行、一九頁参照

象を受ける。だが、はたしてそうなのだろうか。

公卿は七十余歳だった。けいれい、ある年

の望月間近かへかぐや姫を養ひたてまつること

赤巻 竹取物語 64頁1行

赤松の取物箱 64頁1行

不 13.5 24.7 コチ

小野小町 130頁下

小野小町 222頁下末2行

5,507 P

二十餘年後、当時、かくや姫のおかげで『丸十歳
歳になるのでなく、何と年齢が若返り、不思議にも五十
歳ばかりになつてゐた。』とボヘテ
いるようにも考えられる。
②また『五十ばかり』と述べたその文意
の奥に、
〈祖父算は、五十一歳で死去した〉
という背景があつたのだろう。
はつきりしないものの、小野小町は、
へ祖父が、五十ばかりで逝去した
という（ことを）竹取の翁の物語の中、そ
つとまたためておきたかつたのではなからう
か。（第九章〈算の病〉の項（算五十一
歳薨）参照）
③だいいち、世間一般的には、
『五十歳ばかりの壮年男性を』
と云つた男・男の老人』と言ひない
ように思われる。

5.508^P

こと

ようち
幼箱

・ 知らぬ風を装い、さらりと、
「公羽、今年は五十ばかりなりけれども」
と書いたのだらう。

つまり、小野小町は、
へ冒頭あたりの「公羽、年七十に餘りぬ」と
末尾傍の「公羽下今年は五十ばかりなり」と
いう口ちぐはぐを、当然認識していたにも
かわらず、―――物語の趣向として、ちよ
と見たところ、単純な書き誤りとも思え
る。ことと述べたのであらう。

と想察される。
・ 「年月が経つほど年が若くなり、七十餘歳だ
った翁が、―――いつか、五十歳はかりの公羽にな
っていたか」
という筋書きは、口御伽噺（ひがく）に非現実的な夢
のような話として、面白く、興味深い。

*

5509^P

大 変 変 変 変
お か え
お か え
お か え
お か え

万 ③ 295 末 了 行 目
君 来 ま じ ば 8 月 後

因みに述べると「万巻十二三四三に」
次の歌が掲載されてゐる。
露霜の消やすきわが身 老いぬとも
また若反り 君を待たむ
（作者不明）
ようとも「また若返つてあなたと恋愛した
とある。」
・万葉集には「世の中は無常だ」とか「人
間の命ははかない」とか「恋が苦しくて死に
そうだ」とかいう言葉が氾濫してゐる。
ところが、この一首は「逆である」
人間の体は滅びやすい（と）いう大前提をしっ
かり受け入れ小ながら、その上で「どうするか
それならまた若返水はいいと断言する。」
そしてもう一度、同じ人に恋したいという
逞しさ。
ここで大事な点は、消やすいしものを「体

5.5/0^p

だといつているところである。命とは言いつ

いなる。

命とは、減ひやすい肉体に輝きを与える別の

存在だ。

と古代の人は考えていたようである。

つねに肉体を励ますのは、消えやすくな

いのである。

という。(「朝日新聞」平成二十五年十一月

三十日付)「ハナカニシ先生の万葉塾」(万葉

集)(三)日本古典文学大系、岩波書店、昭和四

十二年十月三十日第八刷発行、二九五頁参

照)

てと」小野小町 254 下 5 行

5.511 P

心
に
掛
り

第一句の

（らん）
うむ 現在の事能くを表す
どうしてか等の疑問をひめて出ている

★「難波江のは、第四句の「人」にかかっているのだらうか。

と歌った。

● 小町は、その悲しみをか、
● 難波江の釣する海人に、
● 女おんなの面おもてには、涙なみだがあつた。
● 小町は、その悲しみをか、
● 難波江の釣する海人に、
● 女おんなの面おもてには、涙なみだがあつた。

● 小舟の上で、時折り手を振る海人の姿が、
● 次第に小さくなつてゆく。
● 小舟の上で、時折り手を振る海人の姿が、
● 次第に小さくなつてゆく。

● 難波江（大阪市付近の海面の古称）の岸辺に、
● 舟ふねが、
● 遠くへ漕ぎ渡つて行く釣舟を、
● 見詰め続けていた。

● 小舟の上で、時折り手を振る海人の姿が、
● 次第に小さくなつてゆく。

● 小舟の上で、時折り手を振る海人の姿が、
● 次第に小さくなつてゆく。

● 小舟の上で、時折り手を振る海人の姿が、
● 次第に小さくなつてゆく。

● 小舟の上で、時折り手を振る海人の姿が、
● 次第に小さくなつてゆく。

● 小舟の上で、時折り手を振る海人の姿が、
● 次第に小さくなつてゆく。

● 小舟の上で、時折り手を振る海人の姿が、
● 次第に小さくなつてゆく。

5,512^P

小野小町
前田善子
317^P

同歌
247 末の厚紙用紙

<p>[仙] 歌仙本。 [架] I 架藏小野小町集。 [異]</p>	<p>水な、</p>	<p>とある。</p>	<p>(5) [静] [三] めかれせん</p>	<p>せぬ</p>	<p>(4) [補] [一] 難波江の [二] つりする海士に [三] めかれ</p>	<p>けん [五] 袖やぬれけん</p>	<p>(3) [異] [一] なにはめ [二] つりする人の [三] めかれ</p>	<p>れけん</p>	<p>(2) [架] I [一] なにに江に [二] つりするあまに [三] めか</p>	<p>ん</p>	<p>(1) [仙] [板] [一] なにはめ江の [二] 釣する人に [三] めかれ</p>	<p>[2] 因みに述べると、</p>	<p>ぱり分らない。</p>	<p>とあつて、</p>	<p>人。もわかこと</p>	<p>袖やぬらん</p>	<p>めかれむ</p>	<p>難波めの釣する人</p>	<p>めかれむ</p>	<p>小町集 64 番歌には、</p>	<p>群書類従 巻 第二 百七 十二</p>	<p>ここのところ、</p>	<p>ここのところ、</p>
--	------------	-------------	--------------------------	-----------	---	----------------------	--	------------	---	----------	---	---------------------	----------------	--------------	----------------	--------------	-------------	-----------------	-------------	---------------------	------------------------	----------------	----------------

目指し

架藏異本小町家之集。

神 11 神宮文庫本。[静]

11 静嘉堂文庫本。[一] 11 初句。[二] 二句 (以下、

之に準ず)

を示す。(「小野小町」前田善子、三省堂、

昭和十八年六月十五日発行、三一七、三四六

頁参照)

・ともあれ、

「人もわかこと 袖やぬるらん」

13.5 AM 人も我がごと (我と同じように) 袖を

濡らして いるのだらう

というのだから、

へ小野小町が、その人 (女の) 人に同情を

寄せていた

ということがわかる。

*

小野小町は、難波江で舟を乗り替え、西

の筑紫の島の方へと下つていった。

小野小町は、生まれ故郷 天上国の小野の

いとま
こと
おれ

5,514^P

里』へ舞い戻ろうと思うのだった。

*

一方、宮中では、帝が、天を仰いで長嘆息

しておいでになった。

天上の国へ帰らねばなりませんので、お暇

(お別れ)申し上げますと。

そんなことをさせてなるものかしら
竹取の公卿の物語を読んだ帝は、なおいっ

層『小町に心を引かれておいでの御様子

だった。
小町を曰大倭国(九州)へ帰らせー

まったら、朕の面目は丸つぶれだ

大倭
朕リ、わが

捨てられはったのね 捨てられはったのね 捨てられはったのね 捨てられはったのね 捨てられはったのね
 5,515P 第一巻 13頁に 流石 へそ 小 野 小 町 田 とい う 女 人 へ 可 哀 相 だ 捨 て ら れ な さ っ た の ね だ っ た か 帝 と い え ど や は り 世 の 男 共 と 同 じ 尊 敬 へ 応 じ ます

へ 帝 と い え ど や は り 世 の 男 共 と 同 じ
 であ った か
 へ お 可 哀 相 だ 捨 て ら れ な さ っ た の ね
 流 石 へ そ 小 野 小 町 田 とい う 女 人
 嬉 嬉 と し て 語 り 合 う 巻 の 噂 話 が 聞 えて
 き そ う で あ る 。
 破 線 に す べ る へ だ っ た り
 (世 間 人)

さ利く、ま効く
ききめがある

5.516^P

町集 18番歌と舟とある。

(ニと)

前頁へ

「たが、一」
こに帝は、思案された。

*

小野小町の乗る舟は、須磨の浦あたりにさ
かかっていた。(第545回 写真図版 802 参照)

さだめたることもなくて、心ほそきころ
すまの浦の浦漕舟の櫂よりも
よるべなきみぞ 悲しかりける

(群書類従本「小町集」他)

小町の心は、悲しみに、打ちひかれ、
たのだった。

へとんでもない、大それたことをしてま

へでも、私には、他に、術が無かったのよ

小町の心は、千々に乱れた、
*なお、舟を漕いでいる、
*な

である。

*「より」
の、意味が利かせてある。

(*)

5,577P

・カラー
左頁の上半分にはみ出して、
大きく掲載
下さい。



第545図

明石・須磨・難波あたりの地図

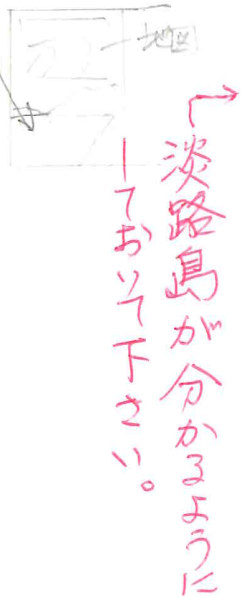
『新詳高等社会科地図』 帝国書院 平成3年3月25日発行 100頁参照

・明石の浦も、須磨の浦も、白砂青松の風光明媚を以て知られた。(「広辞苑」<明石><須磨>参照)

12QG 34

5,518P

- ・白黒。(元紙)
- ・左頁の下半分に大きく掲載して下さい。



14QGゴ4 中心3.7km

半字アキ

写真版 802 約2kmにわたって続く白砂青松の須磨の浦

13QGゴ4

ふるさとの文化遺産 郷土資料事典『兵庫県』人文社、1997年10月1日発行、4頁参照

21

幕^つつていた。
 ④ そんな時、東^{とう}方^{ほう}彼^か方^{なた}から、早^{はや}船^{ぶね}が物^{もの}凄^{すご}い凍^こ
 度^どでやつてきて、小^こ町の乗^のる舟^{ふね}の道^{みち}行^{こう}を妨^{さまた}げ
 た。
 ⑤ 早^{はや}船^{ぶね}上^{じやう}の急^{きゆう}使^しは、礼^{れい}儀^ぎ正^{せい}しく、こ^こう言^いった。
 「帝^{みかど}が、大^{だい}船^{せん}団^{だん}を率^{ひき}いて、こ^こち^ちらへ参^{まゐ}ら^う小^こ
 ます。い^いざ、こ^この海^{かい}上^{じやう}で、お待^{まち}ち願^{ねん}い^いと^う存^{ぞん}
 い上^あげますし、海^{うみ}の向^むこ^うに下^{くだ}
 ⑥ やがて、東^{とう}に広^{ひろ}がるぎ^ぎら^らび^びや^やかな楼^{ろう}船^{せん}か
 見^みえた。そ^その左^{ひだり}右^{みぎ}お^およ^よひ後^{こう}方^{ほう}に、無^む数^{すう}の舟^{ふね}
 が、整^{せい}然^{ぜん}と一^{いっ}た隊^{たい}列^{れつ}を組^くんで並^{なら}び^び々^々全^{ぜん}体^{たい}が一^{いっ}団^{だん}と
 な^なつて、小^こ町^{まち}の方^{ほう}を指^さし、肅^{しゆく}肅^{しゆく}とや^やつて来^きる。

小町の心の内の悲しさは、堪え切れないほど
 あたりの空が、白白と明るくなっていた。
 東の方に横たわると、大和島
 振り返ると、東の方に横たわると、大和島
 がある。(第546回へ明石の浦へ参照)
 明石の門より大和島見ゆ
 天離る表の長道中、結ぶ来れば
 本人麻呂の歌
 万巻第三十一二五五に、よく知られてゐる柿

杵必要

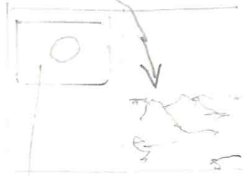
5,520 P

なぎ目が、めだたないようにしておいて下さい。

杵必要

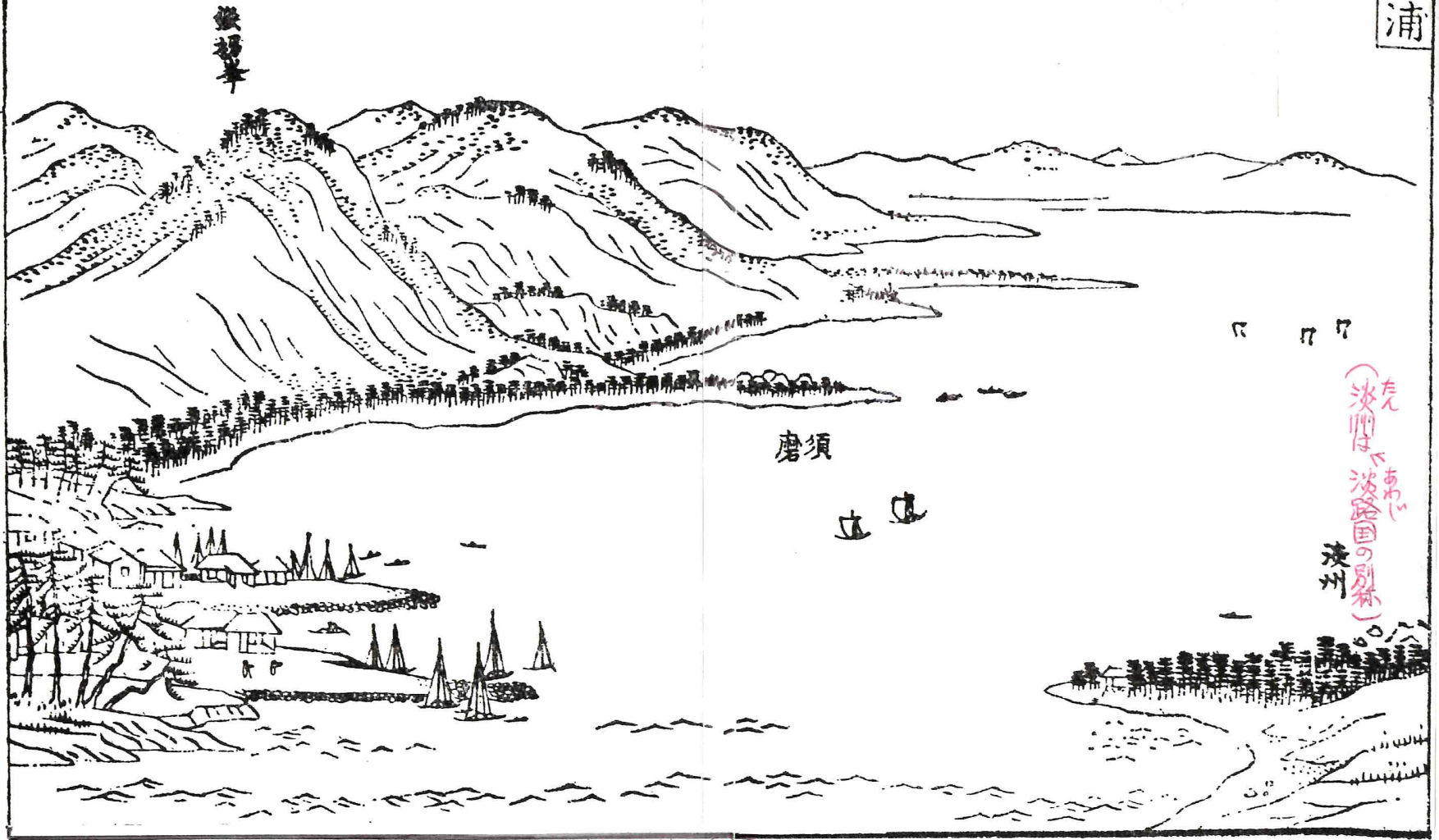
白黒

右頁の下半分に
大きく掲載下さい!!



次頁の
有明の月

播磨明石浦



たえ
あわい
淡路
淡路国の別荘

第546図 明石の浦(山水奇観)

『明石市史』上巻 明石市役所 昭和35年3月31日発行 67頁 他参照 178 P
・奥は、大和島だろうか。

黒岩涙香 (黒岩周大) は、
君(侍たむ)頭前
長月の有明の月の有つつも
君(来まさ)は、待もこそせめ
小町集
下さるのですもの、私(私)も帝をお待ち致
ますわし
ここに小町は、清水やかに歌った。
のだけれど、帝御自身かこのように迎えに來て
は十五日以後を云う、
の月、夜明けになお空に残る月、ハ雲御抄
行くべき筈だった西の方(ほう)に目をやると、
た。とはいえ、今更、断りきりものではないか
や懺りをはためかせていた。
小町は、まだ、心の整理(せいり)がついていなかった。
どの船も、どの船も、大い様々な多数の旗
は、十五日後を云う、
の月、夜明けになお空に残る月、ハ雲御抄
行くべき筈だった西の方(ほう)に目をやると、
た。とはいえ、今更、断りきりものではないか
や懺りをはためかせていた。
小町は、まだ、心の整理(せいり)がついていなかった。
どの船も、どの船も、大い様々な多数の旗

4枚前指して

20の
コヒ
235P

ことわりや日の本ならは、照りおせめ
た。道理

カット ←

5,522P

→ カット

400%にup
16cm

・カラー

・左頁上半分に、
限度一杯はみ出して
掲載下さい。

↑
カット

・月を小さく(なりで)下さい。

・空を、濃い青色の
部分のベタにて下さい。

・月のかたむきも、この写真
と同じにて下さい。



・月の輪郭部分は、
現在のママで結構
です。(シャープにしないで
下さい)

↓
カット

本書には、図版や挿絵

基準線

↑

↓

14QG

写真図版 803 有明の月

12QG 13QG 『月の本』 林完次 角川書店 2000年9月30日再版発行 11頁参照

・平成27年(2015)10月31日【陰暦9月19日】の日出6:17以降に撮影した有明の月(月齢18.1)と、色・形共にほぼ同様。
・なお『いまちつき』(陰暦18日の月)は枕詞として「あけ・あけ」にかかる。(広辞苑) 180P

遥拝する」
る 皇宮でも十月十七日に職員所で親祭下伊勢神宮を

六日「内宮では十六日十七日に執り行なわれ

「外宮では毎年十月（旧暦九月）十五、十

「い、こう言われいている。

因みに述べると「伊勢神宮の「神嘗祭」に

795番歌参照）

である。（万巻十一二三〇〇下「拾遺和歌集

な、本歌は、柿本人麻呂の「
九月の有明の月夜 ありつつも
君が来まさば 水恋ひあやも

「広辞苑」へ「ハ已然形」参照）

の「は」をうけ「確定条件を表わしている」

「めしは、ムの已然形。君が来まさば」

詞である。（「広辞苑」へ「参照」）

「しは、上の語を強く指示して強める助

照）

大正二年七月二十日再版発行下一〇二頁参

と「言うや（「小野小町論」黒岩涙香「朝報社

絶唱とも称すべき一詩です」

「何という調子の好い歌でしょう」古今の

大に「つづむ」
うやうやしくかこまると謹を使う。
受け入れる 承諾する

おのの浦

と抱き寄せた帝は、両腕の内、小所を
「私の妃になつてくれるか」
「喜んでお受け致します」
「もどかーげに」妻迎え船から小舟へと乗
り移った帝は、両腕の内、小所を
「抱き寄せた帝は、両腕の内、小所を」

という「広辞苑」へ神嘗祭(他参照)
「つまり下日神嘗祭に夜を徹して行なわれている丁度
の頃の『九月の月』が『殿』で取られているわけである。
『舟』の船にも見える豪華な龍船が近付い
てきた時、小所の乗る小舟は、慕い寄るかの
よう、そと接近していった。
眩しいばかりに、ササやかな船の舷側(船端)に
は、にこやかな笑顔の帝のお女が、あつた。
「やがて、海に浮かぶ二つのふねは、互いに
ぴたりと横付けされた。」

百科事 ⑥-660
詳にない
おのの浦 151

夜明けに
なお空に残る月

と「つづむ」
うやうやしくかこまると謹を使う。
受け入れる 承諾する

5562 壬辰3年(887)6月

小町姫

HM

平凡社〈竹取物語〉参照)

●また、『竹取物語』は、源氏物語(絵合)に「物語の出で来はじめの祖」と記されているように、十世紀後半以後さかんに作られることになる物語文学の先駆的作品となっ
たのだった。(史料による日本の歩み「古代編、吉川弘文館
三三五頁。「竹取物語・伊勢物語・大和物語」日本古典文学大
系、岩波書店、五頁参照)

光孝天皇の寵愛

新たな年、光孝天皇の仁和二年(八八六)の春を迎えた。
嬉しい、心ときめく春であった。

時に、光孝天皇は五十六歳、小町は四十六歳であつたる
うか。(第547回)〈光孝天皇〉参照

●『三代実録』仁和二年正月十六日条に、

①「散位従五位下小野朝臣千里爲_ナ山城介」

②「散位従五位下小野朝臣當岑爲_ナ周防守」

とあり、この記事が、仁和二年から三年にかけて多数見ら
れる「小野朝臣」任官記録の端緒をなすものである。

●『三代実録』仁和二年及び三年条に見られる「小野朝臣」

任官記事の回数を数えると、

●仁和二年に、七回(四名)

●仁和三年に、五回(四名)

もあって、……それ以前と較べるに、小野氏一族が際立っ
て幅広く引き立てられている、といえよう。

●『三代実録』清和・陽成・光孝朝の記録中に見られる
「小野朝臣」任官記事の【掲載回数】を示す一覧表を掲げ
てみよう。(第58表参照)

●この表で特に目を引くのは、——光孝天皇の仁和二年か
ら三年にかけて、小野氏一族の任官記事が頻出するべ

ということである。
この物語では、

《仁和二年の春頃から、翌三年八月の退位迄の間、光孝天
皇は、愛する小町の爲に……その一族に恩恵を及ぼされ

と考えてみたい。(第九十五章〈光孝天皇の淡い想い〉の項、
光孝天皇の「為人」に「慈仁寛曠。親愛九族」参照)

とはいえこの当時は、藤原氏に遠慮せざるを得ない、思
うにまかせない時代であつた。

だから、小野朝臣を重要な官職にいきなり拔擢するとい
うわけにはいかなかつたであらう。

しかしそれでも、光孝天皇は、小野氏一族の多くを引き
立ててやらずに、おれな

右頁の上(右側)

1/4に掲載

⑤5431~2
小野小町の図像を
左頁に配置する

5,526^P



第547図 光孝天皇

『皇室大百科』朝日通信社、昭和50年3月10日発行、223頁参照

手稿中の
「百人一首」学習研究社38頁に光孝天皇のカラー有る(採出等)也土男才望あり也

と拝察される。

なお参考までに、仁和二年正月十六日から後の「小野朝臣」の任官記事を列記しておくことにしよう。

仁和二年（八八六）

③二月二十一日。散位従五位下小野朝臣喬木^ヲ爲^ス二図書頭^ト。

④同二月二十一日。周防守従五位下小野朝臣當岑^ヲ爲^ス二鑄錢司長官^ト。

⑤同二月二十一日。従五位下行山城介小野朝臣千里^ヲ爲^ス二伊勢權介^ト。

⑥六月十三日。従五位上守刑部大輔小野朝臣後生^ヲ爲^ス二攝津守^ト。

⑦六月十九日。従五位下小野朝臣喬木^ヲ爲^ス二刑部大輔^ト。

仁和三年（八八七）

①二月二日。従五位下守刑部大輔小野朝臣喬木^ヲ爲^ス二山城守^ト。

②三月八日。以^テ玄蕃頭従五位下小野朝臣千邦^ヲ爲^ス二右京亮^ト。

③同三月八日。従五位下行伊勢權介小野朝臣千里^ヲ爲^ス二因幡權介^ト。

○四月十三日。少養正六位下小野朝臣連峯^ヲ爲^ス二大學大

允^ト。

④五月十三日。散位従五位上小野朝臣春風^ヲ爲^ス二大膳大夫^ト。

⑤六月十三日。従五位上守大膳大夫小野朝臣春風^ヲ爲^ス二攝津權守^ト。

津權守^ト。

とある。（『三代実録』。「日本三代実録索引」六國史索引四）吉川弘文館〈小野朝臣〉参照）

*

なるほど、

〈これらの「小野朝臣」の任官記録こそ、……小野小町が寵愛を受けていたあかしだ〉

と見るには、その回数がまだ少ないような感もある。

だが、もしも光孝天皇の御代が長かったならば、小野氏一族の任官記事は非常な数になったであろう、とも想像される。

*

ここに思い起こされるのは、——光孝天皇の仁和二年（八八六）よりも一四〇年ばかり前の唐の国の絶世の美女「楊貴妃」と、「玄宗皇帝」との恋愛を歌った『長恨歌』で

ある。

こういう。

5,528^P

漢皇色を重んじて傾國を思ふ。御宇多年求むれども得ず。

楊家に女有り初めて長成す。養はれて深閨に在りて人未だ識らず。天生の麗質自ら棄て難く、一朝選ばれて君王の側に在り。眸を回らして一笑すれば百の媚生じ、六宮の粉黛顔色無し。春寒くして浴を賜ふ華清の池。溫泉水滑かにして凝脂を洗ふ。侍兒扶け起せば嬌として力無し。

始めて是れ新に恩澤を承くるの時。雲鬢花顏金步搖。芙蓉の帳暖かにして春宵を度る。春宵短きに苦しみ日高くして起く。此れ従り君王早朝せず。歡を承け宴に侍して閑暇無く、春は春遊に従ひ夜は夜を専にす。後宮の佳麗三千人。三千の寵愛一身に在り。金屋妝成つて嬌として夜に侍し、玉樓宴罷んで酔うて春に和す。姉妹弟兄皆士を列ね、憐れむ可し光彩の門戸に生ずるを。遂に天下の父母の心をして、男を生むを重んぜずして女を生むを重んぜしむ。

楊貴妃の出身および入内の過程は、白居易が詩中で述べ

ているほど簡単なものではなく、紆余曲折があるのだが、それをいわないのは、天子に対するはばかりと、恋愛そのものをより神聖にし、美しいものにして、『長恨』の意味を深からしめんとする意図によると思われる。

貴妃は、幼名を『玉環』といい、開元七年（七一九）に

蜀州の司戸參軍楊玄琰の娘として生まれたが、早くに両親を失い、叔父の家で養われた。後、開元二十三年（七三五）、十七歳で玄宗の第十八皇子寿王李瑁の妃となり、これが玄宗に見出されるきっかけとなる。

開元二十四年（七三六）に武惠妃を失った玄宗皇帝は、日夜樂しまず、たまたま驪山の温泉に行幸した際、高力士に命じて外宮をさぐらせ、寿王の妃を得た。

玄宗は、この妃に道教の得度を受けさせ、女道士『太真』として、宮中に入れた。

太真は、歌舞音曲に通じ、よく玄宗の意にかなったので、その寵愛は日々に深まり、ついに天宝四年（七四五）冊せられて貴妃（皇后を助ける正一品の女官）となった。時に、貴妃は二十七歳、玄宗は六十一歳だった。

この後、楊貴妃の一族は、みな高位にのぼった。

玄宗は、楊貴妃におぼれて政治をかえりみないようになつ

た。開元の治とたたえられた玄宗の治世も、晩年には、天子の倦怠、宰相李林甫や、楊貴妃の一族楊国忠らの横暴により、表面的平和にもかかわらず、政治・経済・社会の不安が内在した。

安祿山が、宰相楊国忠との不和から天宝十四年（七五五）

[illegible]

辞典「創元新社」楊貴妃「安史の乱」参照

で、白詩の特質である平易流麗な面が遺憾なく発揮され、

作詞の動機については、陳鴻の『長恨歌伝』に詳しく

「元和元年（八〇六）冬十一月、樂天（居易）は、**整屋**の

住んでみた。

三人は、余暇をみて、仙遊寺に遊んだ。
話がたまたま玄宗と楊貴妃との悲恋におよび、
相共に感嘆した時、王質夫が、

『世にもまれなこの事柄は、天才の筆によらなければ、時と共に消滅してしまふだらう。君は詩にすぐれ、また情愛も深い才人だから、一つ試みに作詩してみてはいかがですか』

白樂天(白居易)が『長恨歌』を作り、陳鴻(ちんこう)が

『長恨歌伝』を作った」

という。「漢詩」藤野岩友、旺文社、一三八頁参照）

つまり、光孝天皇の仁和二年（八八六）より八十年前の

これは、その人の心の中にある、
自分自身を表現するための、
一つの手段である。

おれは『長根歌』の二節と同様に

光孝天皇は、小町を見初めてこよなく寵愛され、………必

UNION

と想像される。

そして又、『三代実録』等に記されてはいないが、ある

47

＜小野小町の父良実は、この頃に『卿』(参議もしくは三位

＜たすな＞ (ト)

もし、このようにも知れない。

なほ小野は

仁明天皇の承和八年（八四一）に生まれた

とすると、仁和二年（八八六）には四十六歳だったことに

227

$$\begin{array}{r} 886 \\ 841 \\ \hline 45 \\ 45 \end{array}$$

5,530^P

三

08 908 988

なる。

そしてこのとき小町の父良実(よしね)は、六十七歳前後であったろうと思われる。

もっとも、この当時迄、父良実が生きていたのかどうかは分からない。

もしかしたら、小町の父良実(よしね)は、追贈(ついぞう)(死後官位を贈ること)されて『卿(きやう)』となっただろうか。しかし、……い

うまでもなく詳(こま)らかでない。

『三代実録(さんだいじつろく)』仁和二年(八八六)の記録を見ると、

■正月二十一日条に、「内宴(ないえん)。奏(そう)女楽(にょがく)。喚(め)文人(ぶんじん)賦(ふ)詩(し)如(ごと)常(じょう)。賜(たま)綿衣(わたぎ)有(あ)差(さ)」

■三月二日条に、「天皇聖體不豫(てんかうせいだいふよ) (御病氣)」「三月五日条に、「帝近日聖體乖(みか)和(わ)。是日平復(このひへいふく)」

■四月十八日条に、

「比日(ひじつ)(毎日)。天氣陰寒(てんきいんかん)。人着(ひとき)綿衣(めんい)。是日(このひ)。天顔清朗(てんかんせいろう)有(あ)二溫氣(うんき)一」

とある。

是(こ)の日(ひ)、光孝天皇(こうこうてんかう)はよほど嬉(うれ)しくて、しかたがなかったであろう。天顔(てんかん)(天子の顔)は清朗(せいろう)(きよくほがらか)にして、溫氣(おんき)(あたたかみ、暖氣)があった、というのである。

5,531 P

あるいは、

「始めて是(こ)れ新(あらた)に恩澤(おんたく)を承(う)くるの時」

のこと(こと)を、このように述べているのではないだろうか。

即ち、是(こ)の日(ひ)、光孝天皇(こうこうてんかう)は、小町(こまち)を妃(き)とされたのかも知れない。

その童顔(どうがん)が、清朗(せいろう)ながらも少々(しょうしょう)上気(じやうき)して、火照(ほて)っていたのである(こと)う、と拝察(はいさつ)される。

そしてこれよりのち、長恨歌(ぎやうこんか)の描写(びやうしや)を思わせるような、「雲鬢花顔金步搖(うんびんくわがんきんほさう) 初夏(しよか)の宵(よ)が暮(く)れてから夜中(よなか)に至(いた)るま

での間(ま)の短(みづか)きに苦(くる)しみ、日高(ひたか)くして起(お)く。敏(みね)を承(う)け宴(えん)に侍(し)して閑暇(かんか)無(な)く、種(くさぐさ)種(くさぐさ)の遊び(あそび)に従(したが)ひ夜(よ)は夜(よ)を専(せん)にす」

といった楽しい日々(ひび)が打ち続(つづ)いていったように思われる。

*

ではここに、「群書類(ぐんしゆり)従(じゆ)の文筆部(ぶんぴつぶ)におさめられている『玉造小町子壮衰書(たまづるこまちしそうすいしよ)』の長文(ながぶん)の中から、処(しよ)処(じよ)抜粹(はつすい)してみよ

う。

花帳(はなどう)の裏(うら)に寵(ちゆう)せられて外戸(がいこ)に歩(あゆ)まず。珠簾之内(しゆれんのうち)に愛(あい)せられて傍(たが)の門(かど)に行くこと無(な)し。

朝(あした)には鸞鏡(らんきやう)に向(むか)ひ蛾眉(かみまゆ)を点(てん)じて容貌(ようぼう)を好(よ)くし、暮(くれ)には鳳(ほう)釵(し)を取り蟬翼(せみよく)を画(か)きて艷色(えんしき)を理(り)ふ。

面(おもて)には白粉(おしろい)を絶(た)たず、顔(かほ)には丹朱(にしき)を断(た)つことなかりき。

11.10.1.05 256

類 5562P
157

5534P 下1所

桃の顔は露に咲みて、柳の髪は風に梳つる。

楊貴妃の華眼も奈ともなしえず、李夫人（前漢第七代武

帝の夫人）の連睫をも屑ともせず。

綈袖は飄飄て彩雲の翠嶺を廻るが如く、綯袂は瞢瞢て

碧浪の蒼濱に置めるに似たり。（三真図版 804 彩雲）泰恩

綺羅地を照らし、光色天に翻る。

巫峡の行雲は恒に標上に有り、洛川の廻雪は常に袖中に

処り。

花の時を待ちては玉筆をとりて紅桜紫藤の和歌を詠じ、

月の夜を迎へては金絃を操って鶴琴竜笛の妙曲を調ぶ。

口に鳳凰の管を吹けば梁塵廻りて声斜なり。

手に鸚鵡の觴を取れば漢月（天の川と明月）落ちて影靜

かなり。

之に依つて

君臣の子孫は婚姻を日夜に争ひ、富貴の主客は伉儷を時

辰に競ふ。

然れども

爺嬢は許さず、兄弟は諾ふこと無し。

唯王宮の妃として献らむといふことの議のみ有りて、

専ら凡家の妻として与へむといふことの語は無し。

而る間

190

は林 127

三真図版 804 彩雲

148910107244-1/2P 未254

555P 下 254

5,532P

十七歳にして悲母を喪ひ、十九歳にして慈父を殞す。

富貴は天の与ふる所なり、東西南北の雲色定まらず。

愛樂は人の感ずる所なり、生老病死の風の声常なし。

且は樂天（白樂天、白居易のこと。長恨歌等で知られる）

秦中吟の詩を学び、且は幸地嚙上詠の賦に效ふ。

韻を古調に造りて、詩を新章に賦せんと云ふこと爾なり。

寡孤（夫のいないやもめぐらし）にて年を送る処、嫁ぐ

に一狎師（とらえる人の意か。つまり光孝天皇のことであ

ろう）を得たり。

狎師に二婦あり、孤妾に一婢なし。

二妻互に咒咀し、一身自ら憂悲す。

憂悲して日を過す程に、一の男児を産み得たり。

男児の容顔は美しくして、妾が身は形体衰へたり。

我が形の瘦せたるを歎くこと無く、子の兒の肥えたるを

思ふことのみに有り。

秋の霜に素髪を梳り、暁の浪に黄髪を洗ふ。

唇は膠れて朱の潤無く、面は皺になり粉滑かならず。

日暮れば荒れたる閨に眠り、朝闌くるまで壊れたる扉に

伏せり。

（このあたりは、大江惟章を夫としていた頃のことを述べて

いるのであるか）

148910107 256

小野小町 229頁上4行

- ・カラー
- ・1頁の上半分に掲載下さい。

・個人の写真 →

5.533P

朝日H23 (2011)
7月16日(土) 朝刊



この写真がよい。

カット

この写真には、ヤメル

↓カット

彩雲現る 松野忠男さん(石川県=全日写連会員) 5月8日付

トル

動物園で写真を撮ろうと松野さんが入り口に差し掛かったとき、見上げた空に虹のようにきれいな彩雲が見えた。望遠ズームで10枚ほど撮影。2、3分で薄くなり、そ

のうち消えた。彩雲は、晴れた日、太陽のそばに薄い雲がかかった時に、雲の粒にあたった光が屈折して見えるという。金沢総局に持ち込み、翌日の地域面に掲載された。

120G

146G

写真図版 804 彩雲

雲が虹のように輝いて見える ← ← ← ← 「彩雲」を、平成23年5月8日、松野忠男さん(石川県=全日写連会員)が撮影した。

「彩雲」は、晴れた日、太陽のそばに薄い雲がかかった時に、雲の粒にあたった光が屈折して見える気象現象である。

130G

『朝日新聞』平成23年7月16日付 <彩雲> 参照。

(大阪版)

子に紆こむとして櫛櫛し（赤子のきもの）を乞こひ、夫に被おせ

んとして線せん綬じゆを尋たづぬ。

夫に縁よること紫燕しえんの如ごとく、子を愛いとすること斑はん雉ちに似にたり。

鸞らん鴛うん幽ゆう巢そうに栖すみ、雌め雄ゆう故こ籬りに処を。

籬き傾かたきて声こゑ喃なん々なんたり、巢す覆ふくりて啜くさ呑し々したり。

夫は芸能猶げいのうなほ劣なければ、婦つまの貞潔ていけつ最早さいしやうし。

君きみ（光孝天皇）は前まへたちて我われは後おのれ、子こは傷いたみて夫はらは残ほろ

びたり。

父母ふぼは喪もして抛なげ、夫ふ兒じ頑ごんびて依よなし。

涙なみだを捫ぬひて臥ふして恻なや惻うれへ、腸はらを断たちて起おきて喟なげ呻きぶ。

片時かたときも快を乾かき難がたく、長夜ちややも枕まくら蔽おほて易やすし。

愁しう氣きは心しん府ふに余あまり、憤ふん神しんは胸きう腋あきに満みつ。

永ながく往生やうじやうの錢ぜを牽ひいて、忽たちちに発はつ心しん（菩提心ぼだいしん）を起おこすこ

と）の養かてを致いたす。

西方さいほうの尊そんは我われを導みきて、引いん接せつ相違あひたがはざらむ。

中道ちゆうだうの教きやうは我われを憐あはみて、慈哀じあい背せ跂かることなし。

凡ただ、仏乘ぶつじやうを讀よみへんがために、筆ふでをとりにて斯詩こしを作る。

（「小野小町追跡」片桐洋一、笠間書院、三三〜五〇頁より）

部ぶのみ適宜てきぎ抜粹はつすい

つまり、

（光孝天皇が、あまりにも小町を寵愛ちやうあいされるものだから、

5,534^p

——君臣くんしんの子孫こそんが妙麗めうれいの娘むすめを求めようとしても、父母ふぼは許ゆる

さず、「唯王宮ただわうきゆうの妃きとして献けんりたい」と願ねがったぐ。

という情況じやうきやう（この当時の世相）が述べられているゆゑに思おもひだらう。

とすれば、どことなく、白樂天はくらくてん（白居易）の『長恨歌』

に似にているようである。

唐ちやうの国こくの絶世ぜつせいの美女めいじよ『楊貴妃』と、日本にっぽんの国こくの絶世ぜつせいの美

女じよ『小野小町』とが、……時ときと国くにの違ちがひあるにせよ、強

く関連かんれん付けて考えられていたことがうかがえる。

白樂天はくらくてんは、『長恨歌』において、引き続き概略次がいりやくのよう

に歌うたっている。

驪山りしやんの宮殿きゆうてんは高く青空せいこうをしのいでそびえたち、そこに奏そう

せられる妙なる楽がくの音おとは風かぜに漂たふい四方しほうに伝つたわって聞きこえる。

ゆったりと歌うたい、ゆるやかに舞まう貴妃きひの歌舞かぶに合あわせて、

管絃かんげんのしらべが流ながれるようにかなでられ、皇帝てんていは終日じゆうじつ見て

もなお飽あき足たりるといふことがなかった。

（ところが、楊貴妃やうきひと結むすんでその養子ようしとなつた安祿山あんろくざんが、七五

五年ごねん、突如とつじゆ謀反ぼはんを起おこした）

漁陽りやう（今の北京地方）から進撃しんげきする戦鼓せんこの響ひびきは地をゆ

り動かさんばかりに轟轟き、十五万たひんの大軍たいぐんが都みやこ（長安）に攻せ

5532
上154

192

め上ってきた。

千の兵車、万の騎兵から成る官軍は西南の蜀都を目指して出発した。だが、長安の西方百余里（馬嵬坡）で、天子直屬の全軍はどうしても進まなくなった。

ここに皇帝は、安祿山の乱の遠因ともなった楊貴妃に、死を賜わった。

花のようにたおやかな美人は、皇帝の馬前で殺され、花鈿（花かんざし）・翠翹（かわせみの尾の髪飾り）・玉搔頭（玉で作ったかんざし）などが地上に散った。

月日は移り（蜀にあること二年。官軍が賊軍を破って長安を回復したので）、玄宗皇帝は上皇として、長安の都へ御還幸になった。

しかしそこに、楊貴妃の姿はなく、思う人のたましいは夢にさえも訪れてくれなかった。

唐の玄宗は、馬嵬が原で死んだ寵姫楊貴妃のことを忘れかねて、方士に魂魄の在處を探すように命じた。

方士は、天上国から黄泉国までくまなく尋ねても見出せなかったが、……そんな時、「海上に仙山があって、その山は大海の広々としてかすかな中にある。玉のごとく光り輝く楼閣に五色の雲がたなびき、そこには、しとやかな仙女が多く住んでいる。其の中

に、字を玉真という者がおり、雪のような膚や花のようなかんばせは、どうやら探し求める人のようだ」

と聞いた。方士が蓬萊宮に来ると、貴妃は玉の簾をおし開いて現われた。その玉のような美しい面には、悲しみの色が見られ

た。太真（貴妃）は、情のこもった眸でじっと見つめながら皇帝への御挨拶をことづけて言う。

「一度お別れして以来、お声もお姿も拝することのできない遠いところへ来てしまいました。昔昭陽殿の内でお受けいたしました恩愛の情も今は絶え、ここ蓬萊宮の内に移り住んでから、もう長い年月がたちました。ふりかえって人

里のあたりを望み見ましても、なつかしい長安は見えず、塵や霧がもうもつとしていているが見えるだけです。ただ昔をしのぶ形見の品々を差し上げ、私の深い心のしんど致

しましょう。このかつて皇帝から賜わった青貝細工（螺鈿）は片方の脚を、香盒（香料を入れる容器）は蓋と身のうちの一方を留めておきます。こんなふうにすれば、天上にお

いてか地上においてかは分かりますが、とにかくきつと相見える機会がございましょう」

方士が別れ去るに際して、太真は再び（玄宗への）言葉
を託した。その言伝ての中には誓いの文言があり、これは
玄宗と貴妃の二人が心に知っているだけのものであった。

それは、天宝十年（七五一）の七月七日、七夕の夜の
半、長生殿（玄宗が楊貴妃を伴って来訪した驪山の離宮）で

他に誰もいない時に二人がささやき交わした際の、

「もし空を飛ぶ鳥に生まれ変わったとしたら、雌雄がつが

いにならなければ飛べないという比翼の鳥となるう。もし

地上に生える樹となったならば、枝と枝とが連なった連理

の枝となるう。（こうして、二人はいつまでも離れまい）」

という誓いだった。

永久不変といわれる天地さえ、いつかは尽きることもあ

らう。

しかし、この誓いが実現されないまま、相思の二人が離

れ離れになつていくという恨みは、決して尽きることなく、

いつまでも続くであらう。（「漢詩」藤野岩友、旺文社、二一

九～二九九頁参照）

すなわち、白楽天は、

〈楊貴妃の魂魄（靈魂）は、東海の海中に絶在する蓬莱宮

に移り住んだ〉

と歌っているのである。

5.536^P

そこで、玄宗皇帝に寵愛された絶世の美女『楊貴妃』は、
……極めて自然に、光孝天皇に寵愛されている絶世の美女
『小野小町』と結びつけて考えられることとなったように
想像される。

①なお、先述のとおり、白楽天は元和元年（八〇六）頃
『長恨歌』を作りはじめたというのに、……小野篁（八〇
二～八五二）は、早くも白楽天（＝白居易）の影響を受け
たのだった。次のように説示されている。

「小野篁は、惟良春道と共に、白居易の影響を受けた最も
早い詩人。『扶桑集』の作者である。『西道話』『謫行吟』
の詩作があったが、伝わらない」

という。（『國書繪目録』岩波書店〈小野篁〉参照）

②また、『長恨歌』が『源氏物語』に与えた影響は著しく、
ことに桐壺巻では単に語句だけでなく、その構成上の参考
になったと思われるところもある。

さらに『長恨歌』は、『枕草子』、『平家物語』、『源平盛
衰記』、『十訓抄』、『太平記』、『和漢朗詠集』、謡曲『楊貴
妃』『皇帝』、琴曲『長恨歌』などにも影響を与えた、とい
う（「漢詩」藤野岩友、旺文社、二三五～二三八頁参照）

*

ところで我々は、

●「小野小町」という名を聞けば、「絶世の美女」とい

言葉を思い浮かべ、

●「絶世の美女」と言えば、ただちに「小野小町」の名を

思い起こす。

つまり、「小野小町」と「絶世の美女」とが、非常に強

く直結している感がある。

一体どうしたわけで、そんなことになったのだろうか。

■世間のごく一般的な心情面から言えば、

「采女あるいは中蔵女房として宮仕えしていた一人の女性

を、——日本国中の老若男女全てが異口同音に『絶世の美

女』と呼び、誉めちぎって絶讃する筈など、決してあるま

い」

と思われる。

■また、誇り高き宮中の高貴な女性達さえも、小野小町が

『絶世の美女』と呼ばれていることを黙認したように見受

けられ、この当時の尋常ならざる様子が察せられる。

■平安朝以降長きにわたり、『小野小町』が美女達のなか

でも特に際立って美しい輝くばかりの『絶世の美女』を指

す愛称ともなっていることに、誰も異論をさしはさまない

ところを見ると、……必ずや小野小町は、かなりの高位

『妃の位』にまでのぼったのであると、と想到される。

止雨の和歌
(日の本、ざりとては又あめが下とは)

それにしても、なぜかしら、——今年、仁和二年（八

六）の夏から秋にかけて天候不順で、雨が多かった。

『三代実録』から抜粋してみよう。

●五月十日条に、「自^二去七日^一大雨。河水漲溢。人馬不^レ

通」

●五月二十三日条に、「大雨」

●五月二十六日条に、「降^レ雨」

●六月十三日条に、「自^二今月朔^一霖雨。京師飢困。開^二

倉廩^一之^レ」

などである。

●さらに、八月四日から七日まで霖雨が降り続いたとい

それではここに、予め、——秋八月七日条を引き写して

おくことにしよう。こう記されている。

「七日癸丑。自^二去四日^一霖雨。至^レ此大風雨洪水。分^二

遣^ス使者於賀茂上・下、松尾、稻荷、貴布祢、丹生河上六

社^ニ。奉^リ幣^ヲ祈^ル。止雨^一。告文^ニ曰^ク。天皇我^ニ此旨^ヲ。皆^レ

掛^ス畏^ル松尾大明神^ヲ廣前^{（御前）}。申賜^ニ止雨^一。方^ニ今秋^一稼^ラ

登^ス熟^ス酒^ヲ。利^ニ時^一。大神^乃厚^ニ護^ル。依^テ之^ヲ。風雨^乃災^{（災）}不^レ起^ス。天^之。五穀^不

小野小町 189下 25行
史料による日本の歩み 245下 35行

[illegible]

○ ৩৪৮

■さて、仁和二年（八八六）七月十三日頃のいしであった。
あつか。小町は、なつかしそうに言った。

「昨年の秋七月に『おぼろ雨乞の和歌』を歌ってから、もう一年にもなりますよ」

「た、お、お、お、お」

光孝天皇は、その時の小町の優雅な所作について、人づ

てに聞いたしとを照し出された。

「うむ、そうよ。そなたが『丹生河上神社』で和歌を詠むところを、私は、是非ともこの目で見たい。今度は、『雨が止むように祈る和歌』を詠んでくれないか」

さあそれからというもの、光孝天皇は、

〈いっ長雨^{ながあめ}が降^ふるだろつか〉

と、毎日毎日空ばかり気きにしておられた。

5,538^P

しかし、待^{まち}っているときには、なかなか雨は降^ふり続^{つづ}かな
いものだ。……降^ふったかと思^{おも}うと、す^すぐに止^とんでしま^まうの

た　　た　　。

■ところが、八月四日から降り出した雨は一日中降り続き、——さらに、一日目の八月五日の朝になって、まだ止み

水にはかゝる。

ここに、光孝天皇は、こう言われた。

「六月の霖雨は、都の者達を大いに困窮させた。四日から降り続けているこの霖雨が、再び人々を苦しめないように、

止新集

その詔みことりを聞いた朝臣あそしん達は驚おどろいた。

「仰せ、誠にこの度も誠にありがとうございます。かしこい
『霖雨』とは申されましても、降り始めてからまだ一日目

であります故、いましてらく様子を見て、被害が予想され
るようになつてから『止雨』を祈願された方がよろしいか

と存じ上げます」

「いやいや、被害^{がいがい}が出るのを待つ^{まち}ようなことはしたくない。でもそも、止雨^{とど}を祈願^{いの}するのに、『早すぎる^{はやすぎる}』筈^{はず}などない。

ではないか」

光孝天皇は、何としてでも、小町をつれて『丹生河上神社』へ行きたいとお思いになるのだった。

〈それはそうと、朕の行幸に、大勢の朝臣達がぞろぞろついて来たのでは、興を削ぐ。……なんとかならないものだろうか〉

こうしたわけで、光孝天皇は、朝臣たちを六つに分け、六つの神社で『止雨』の儀式をとり行なうことにされた。賀茂上・下、松尾、稻荷、貴布祢、丹生河上の六社である。

当然ながら、『丹生河上神社』へ追隨してくる者達の数は少なくなる《勘定である。

「皆、よく聞かたよい。昨日、今日、明日の三日間降り続いて、さらに明後日の八月七日になってもまだ雨が降っていったら、『雨が止むように』と祈請せよ。朕も、今から『丹生河上神社』へ行幸し、おさってになってもまだ雨が降り続いていたら、『止雨』を祈る」

こう言つと、光孝天皇は、小町の乗った牛車に乗り込まれた。牛車は、雨の中を、ただひたすら南を指して駆けていった。

雨はいっこうに止みそうになくて、いよいよ強くなっていくばかりであった。そして、時折り、烈風までが吹き付けてるようになっていた。

5,539^p

天の行幸 24行

長雨をもたらす秋雨前線に引き続いてやって来る台風の影響だったのかも知れない。(「天体・気象」原色学習ワイド図鑑、学研、一四七〜八頁。「世界大百科事典」平凡社〈台風〉参照)

第48回 秋明前線に引き続いてやって来る台風

ともあれ、光孝天皇と小町を乗せた牛車は、『丹生河上神社』に着いた。それは、八月七日のことであつたらうか。雨足は一段と激しさを増し、風が山の木々を揺すっている。

ここに、光孝天皇から《和歌を詠むように》と促された小町は、祭壇の前に立ち、神に祈りをささげた。厳肅な時が流れていった。

やがて、小町は歌い出した。ことわりや日の本ならば照りもせめ

ざりとは又あめが下とは

『日の本』という我が国の国名からいって、日が照るところを道理というものでありましょう。ところが、さりとてはまた『あめが上』でなくて、何と『あめが下』とも申します。このように、この世を『天下』(雨が下)ともい

うので雨を降らせておいでなのかも知れません。しかし、そろそろ、「ことわり」通りに雨上に雨上りをお願い致しよう存

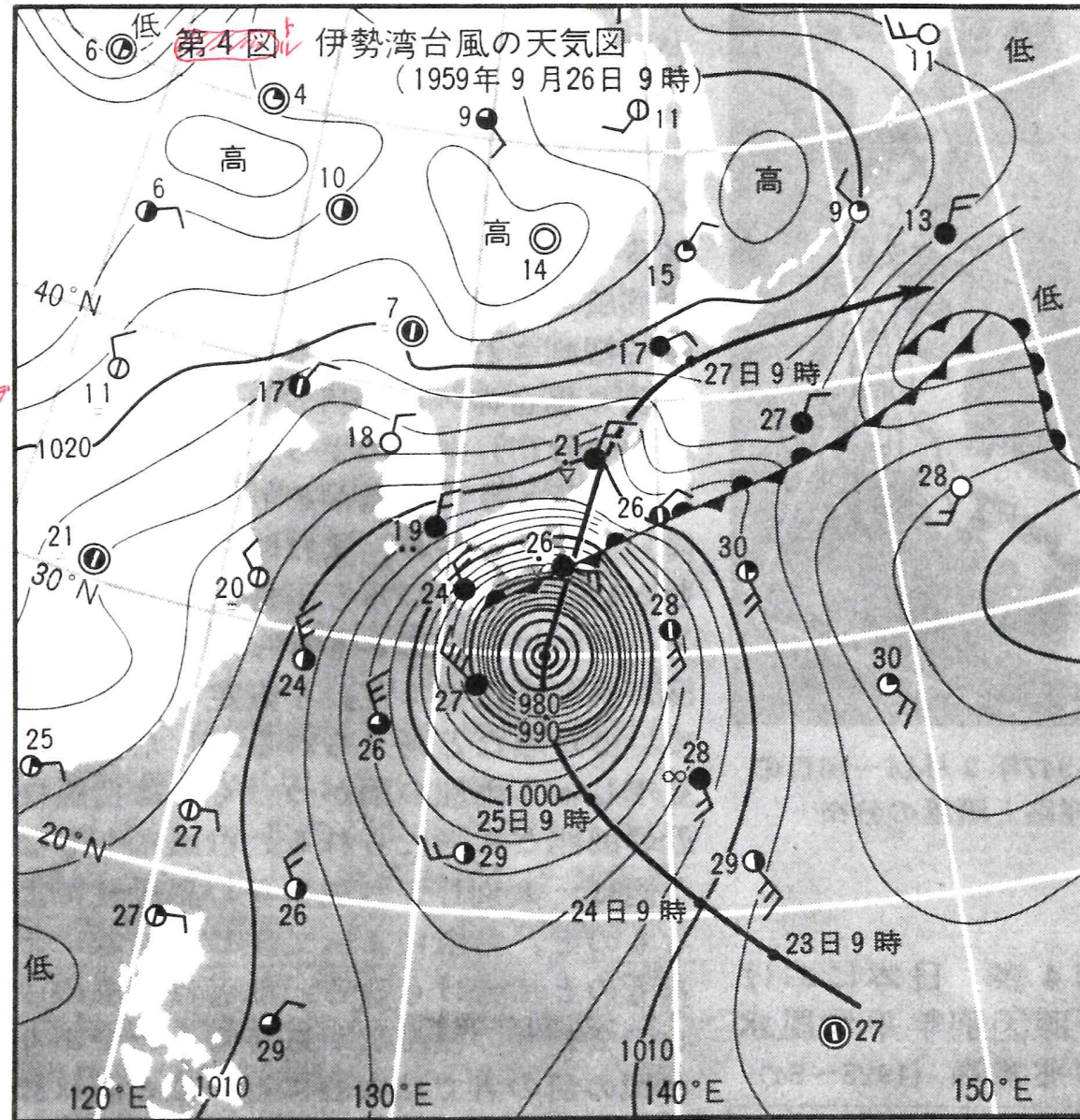
※「あめ」は△の已然形である、先述の小町の歌へ

5,540^F

小冊子 2版 235頁下右1/4

上頁の右上(1/4頁)に、
 限度一杯はみ出して
 大きく掲載下さい。

特例として、
 枠をつけて
 おきたい。



13QG

14QG

第548図 秋雨前線に引き続いてやって来る台風の例

12QG 『世界大百科事典』19 平凡社 1972年4月25日発行 183頁参照
 ・おそ たいふう 幾分小さい台風が 近畿地方を かすめたのであろう

198^F

